

日本山岳会 越後支部報

第 7 号

平成25年5月20日
発行 日本山岳会越後支部
発行者 山崎 幸和
新潟県燕市吉田大保町4-8
TEL・FAX 0256-93-2655
広報委員長 加藤 明文

私の一枚

川内の山は1000m前後の標高でしかないが、奥深く、豪雪、沢は深く急峻な地形、密藪、おまけに山蛭の生息地で、人々をなかなか寄せ付けない。中でも、以前登ったことのある割岩山はほとんど訪れる人もなく、ひっそりと佇んでいる。

写真の説明

【五剣谷岳からの割岩山(左)と矢筈岳(右奥)】

佐藤レイ子 (新潟市)



故横山征平 (No.12270) エピソード集

支部名誉会員 平 田 大 六 (No.5804)

岳友、横山征平(せいへい)支部会員(以下「征平さん」)の遭難のことについては、越後山岳No.12(二〇一二)で追悼の機会をいただき、支部の皆さまの、永年にわたるご交友に感謝を申しあげさせていただいたところ。本報では、征平さんの生前のエピソードを、二、三紹介させていただきます。

【記憶力】 征平さんは、関川村山の会の創立以来の事務局長でした。会では時々、地元の未踏の山域へ入り、残雪やヤブの踏査をやっています。この時、征平さんの記憶力が発揮されました。往路をひきかえしてきて、こんな所通ったかな、と云い合いますと、「この木は登ってくる時にあった」とか、「まもなくヒドがあるはずだ」とか云うのは征平さんでした。ヒドというのは関川村では、水の流れてない小さな沢状の山ヒダのことです。GPSなど不要で、まさに天与の才能というものでした。

【縄文人】 征平さんは若い頃、一時(いつととき)炭焼き生活を経験しています。山中に、未踏の山中で凹地が現れると、この穴は人工物か自然のものか、論議することがあります。その時に可否断定をくだすのは征平さんでした。

関川村へ一九八六年以来、東京の帝京大学考古学研究室の教授が学生たちを連れて発掘実習に来村しつづけています。二〇一〇年調査の時に、炭窯跡が発見されました。これが、縄文のものか現代のものかわからない。付近に民家があり「実は祖

父の代に炭焼いていた」では、話になりません。すぐ私は教授に征平さんを紹介しました。早速現場へきた征平さんは、残っていた窯の石組みをみて、この石の並べ方は現代のものではない、と断定しました。これは大発見になりました。(註)

【写真家】 征平さんがプロなみの写真家であることは、地元でよく知られていることです。村で出版している登山地図の写真や文芸誌のカットにその美しい作品が多く残っています。転落事故の日の風景や参加人物スナップも、その時身につけていたカメラから回収され、再生されています。

そのカメラは、ミノルタα7000です。私は、この機械を買う時に、一緒に新潟市の大型店へ行っています。征平さんは無造作に手に取って、あっさり新品を買ってしまいました。

いま使ってるのと同じ機械ではないか。そうだ。使いすぎてシャッターが減りスピードが少し変わってきてるから。

なんと。私なんぞは、古いカメラを集めて喜んでいきますのに。しかもその時は、「シャッターの減った」古い愛機を、そのまま店に置いてきたのです。下取り代金をもらわずにです。まさに、この道のプロの姿でした。

征平さんに関するエピソードは、まだまだたくさんあります。いくつかの機会にお話させていただきます。

(註) 阿部朝衛「新潟県荒川台遺跡第十二次調査略報」帝京史学二十七号(二〇一一)

新潟県の峠道紹介

弥彦山塊「猿ヶ馬場峠」

山崎 幸和 (燕市)

県央部の平野から聳え立ち日本海に接する南北わずか一七kmほどの弥彦山塊は、西蒲三山とも称され、昔から海と平野を結ぶ生活道の峠が五本あった。五ヶ峠と間瀬峠は今も残るが、角海峠・石瀬峠・猿ヶ馬場峠は七浦シーサイドラインと弥彦山スカイラインで寸断され廢道となる。中でも猿ヶ馬場峠はスカイラインの野積浜と弥彦山への分岐点となって、由緒ある史跡や茶屋など破壊され、かつて北国街道の名勝地といわれていたその風情は失われた。

越後を北上する北国街道は海岸沿いに柏崎〜寺泊〜野積と来て、標高一八〇mほどの猿ヶ馬場峠を越えて初めて平野部に入ることができた。峠から広大な越後平野と日本海に浮かぶ佐渡島、その絶景を眺め弥彦神社を間近にした旅人には心安らぐ峠であったが、冬季節は雪と日本海から吹きつける寒風で様相が一変する難所でもあったという。明治十一年明治天皇御巡行に際し、ようやく弥彦〜国上〜渡部〜寺泊への新道が開かれたが、それでも風光明媚なこの峠には多くの人々の往来が昭和初期頃まで続いた。江戸時代には松尾芭蕉や十辺舎一九、そして吉田松陰らも越え、逸話や伝説も多く史跡も残っている。

その中に、寺泊の本間弥平治ほか二人が先祖の供養に建立したという「明和八年(江

戸中期)宝篋印陀羅尼塔」刻字の大きな宝篋印塔がある。この真向かいには旅人たちのために馬場屋という茶屋兼鉢泉湯が昭和十年頃まであって、古くは富士見茶屋といわれ、近くには弥彦山を拜む地として鳥居も戦前まで建っていた。ここから眺める弥彦山がわずか三步の間、富士山と同じ形に見えることから「三足富士」といわれ、江戸後期文政年代の『続・膝栗毛』で長野・善光寺から会津への旅で、十辺舎一九がこの峠で歌ったという

「通ふ人二足の間を家づとにするがをここに三足富士」

の歌碑や祠、石仏などもある。

もう一軒、西側に亀ヶ屋茶屋(のち金兵衛小屋)という茶屋もあった。この小屋はかつて昭和三十八年から吉田山岳会が借用管理として「猿ヶ馬場峠山荘」と名付け、春は山菜、秋はきのこ、冬は山スキーと楽しみ、弥彦山と国上山への登山道伐開の拠点として活用していたが、四十四年スカイライン工事を取り壊しとなった。この峠は西蒲三山縦走路の伐採開始地点でもあった。

峠の名の由来については、太古に伊夜比古大神が上陸した野積浜から弥彦へ向かう時、この峠で見送りの女神と「さらばさらば」と手を振って別れたことから「さらば峠」と云われたのが訛って「さるが峠」となったという伝説に、峠周辺は馬が駆け回られるくらい広い平地だったので幾度も合戦場となり、峠が馬場に変わったともいわれている。

峠での主な合戦に、平安後期応徳二年に乱賊・黒鳥兵衛を討伐するに朝廷から派遣された北畠時定が戦ったとか、戦国時代永正六年に越後守護代の長尾為景(謙信の父)が弥彦領主・大須賀志摩守を破った戦などが伝承されている。

この珍しい猿ヶ馬場の地名はこのほかに、県内では新潟市東区の猿ヶ馬場と新発田市の猿ヶ馬場山二〇二mがある。県外には長野県千曲川市に九六〇mの峠、岐阜県白川村に一八七五mの山、広島県三次市にも三五四mの山がある。新潟市だけは平坦の住宅地で、他はみな山間地にある。

弥彦山と双耳峰の多宝山に一等三角点本点と天測点があり、その真南約四・一kmの猿ヶ馬場峠の南東屋根一四〇m程の標高に子午線標がある。この天測点と子午線の標石は昭和二十九年から天文経緯度と方位角を観測するため、全国九六九ある一等三角点の主要四十八点に設置され、その一ヶ所がここにある。特に子午線標は地図上無表示のため、その探索と発見の醍醐味を求めて、この三点セット全国探訪山行が二十余年前の平成初期頃から静かな人気となっている。

風情が失われたとはいえ、猿ヶ馬場峠にはまだ知られざる自然や史跡がある。雪割草やカタクリの群落も。それには春、西蒲三山縦走路を歩くに限る。



私が登山に芽生えた時代の綴り

樋口 宗一 (五泉市)

旧制、中蒲原郡金津村高等小学校を十五歳で卒業して、我が家は、朝日集落に住み、約五町歩の山林があり、よい就職先が無いので、帝国石油会社に勤務していた父は、山林の管理を私に命令していた。雨の降らない限り、毎日のように山に出かけて、草刈・山道の整備・立ち木の選定の作業を行ってきた。

我が家の山の山頂は二等三角点があり、海拔二一五mで展望はよく、五頭連山・普名山系を対峙した西山連山中にある一角の山であった。天気の良い日は作業の休憩時間にも楽しんで、かすかに見える白い飯豊連峰へ、登りたいと考えながら眺めていた。二十一歳の春、石油採集会社へ勤務することが決まり、家から山道を約四十分歩いて通勤する。この会社は従業員が六名で昼夜交代で、各石油井戸が山の中に在り、ポンピングパワーの機械でくみ上げ装置の建物が在り、各井戸と導線の点検の作業で、月夜の晩はとも新発田市の夜景と近くに、新津市の夜景が素晴らしく幻想的で有った。弥彦山が薄く映えて眺められ、当時はとても楽しく勤務することが出来た。

会社に登山の好きな先輩がいて、飯盒でご飯の炊き方と、色々と登山のお話を聞き益々山に登りたくなり、その後、先輩と三人で村松の白山へ登山に行く。当時は、蒲原鉄道五泉駅より村松駅まで乗り、村松町より歩き白山の麓、慈光寺の登山口まで、当時は登山道は無く滝谷川を頂上を目指して遡行して、山頂は藪の中、大きな木に登

り、粟ヶ岳や遠くに磐梯山や飯豊連峰が眺められた。

その後、六月に先輩と四人で粟ヶ岳へ登山に出かける。前の日に蒲鉄の黒水駅に下車して、岳山寺の境内で一枚のシートで屋根を張り、夕食に飯盒でご飯を炊き、鯨の缶詰で夕食の時、先輩のウイスキーを戴き、初めて飲み、目が回って早々にアメリカ進駐軍の白い寝袋で睡眠をとる。あくる朝、粟ヶ岳へ。当時は山靴も、進駐軍の払い下げ品で靴下を何枚も重ね履き、出発する。山頂の稜線には一部雪びが残っていて、川内側にはニッコウキスゲの花が黄色く一斉に咲いていた。現在は花は絶えて、その花は見られない。昼食の残りのウイスキーで粉末ジュースを入れて飲み、その美味しさは今でも忘れられない。

その後、二十四歳頃より越後天然ガス株式会社へ入社、新津市・五泉市へ都市ガス供給会社で、この会社で越天山岳部を創設する。会社の社長が明治大学の炉辺会に席あり、会社での登山活動に理解を示され、私が日本山岳会入会後初めて晩餐会で大塚博美さんへ社長の伝言を伝え、小出先輩はお元気ですか、宜しくとのこと社長に伝える。

当時の登山の交通機関は、国鉄とバスで、現在のようなマイカーはまだ無く登山の範囲が限られていた。日帰りの山は主に、五頭山・焼峰山・白山・前夜発の山は、谷川岳・粟ヶ岳・二王子岳等で、昭和三十五年頃よりマイカーの時代で、長野のアルプスや北海道の山々と九州の山々を登る。

外国へは、山仲間、スイスのマッターホルンとプライベートホルンを登る。現在は、マイカーで好きな山を時間をかけて温泉宿を泊まりながら、自然の変化を楽しみながら、山を親しんでいる。

山の紹介

石花高原・城方平(八〇三・八〇六)

地図・二万五千分の一「金北山」、五万分の一「相川」、四等三角点・点の名称松倉山

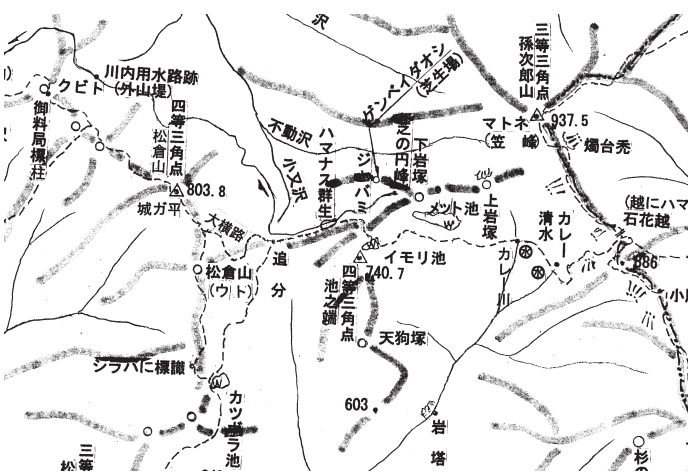
藤井 与嗣明(佐渡市)

ドンデン山から西へ、大佐渡の主稜線と入川溪谷、石花溪谷に囲まれた標高六百メートルから八百メートル。東西・南北にほぼ三キロメートルの山々を、私達は石花高原と呼んでいます。昭和四十年代初め大佐渡の主稜線である、青粘越からマトネ(名称・孫次郎山、俗称・笠峰)や石花越からカレイ川、ジャバミ、追分や平城畑(名称・松坂山)を経て石花集落に至る大凡十二キロメートルが、大佐渡自然歩道として整備されたことが、石花高原への命名であります。

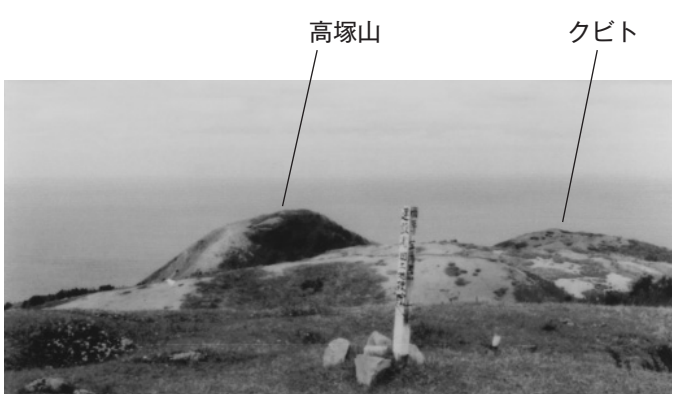
この高原は大小の芝生場や湿地が点在し、春のカタクリやキクザキイチゲ、キジムシロ、シラネアオイの群落。初夏には、レンゲツツジのオオ花園や海岸性植物のハマナスが見られることも、この高原の大きな魅力であります。

また、この高原は昭和の初め頃迄、外海府から海産物を両津や国仲へ運びコイキ(交易)のルートでもありました。

この高原のほぼ中央に松倉山があります。国土地理院発行の二万五千分の一地形図には四等三角点「点の名称・松倉山」、所在は佐渡市北川内字萱尾一七九九番であります。北川内集落では城方平と呼んでいます。松倉山は、この城方平から南西方向



に大凡三百五十メートル、杉に囲まれた無名峰が松倉山、別名ウトと呼んでいます。後尾集落ではウトノと呼ぶとのことであり、ウト・ウトノはアイヌ語のウトウ(広辞苑)で「突起の意」と考えます。また、この高原は最近まで牛が放たれ(自然放牧)、ドンデン山などと共に大きな芝生場が維持されてきました。昭和六十年代以降、農家の畜産離れや高齢化により放牧牛は減少、芝生場の荒廃から、今その山容は大きく変わろうとしています。放牧を終えたこの高原は、ススキ(萱)やノイバラ、モミジイチゴ、サワフタギ、リョウブ、ハナヒリノキ、イヌツゲなどの低木林(雑灌木)に覆われ、やがてこれらの山々は太古の森へその姿を変えようとしています。



城方平山頂 国地院地図では松倉山となっている。中央奥の円峰は高塚山



事務局連絡

日本三百名山プロジェクトの発足

本部の収益事業・会員サービス検討のプロジェクト(節田重節理事)が、今年度の新企画として「新版・日本三百名山登山ガイド」のリニューアルを行います。全国三十一支部が参加協力する事業として展開いたしますので、支部会員各位にもご紹介いたします。

越後支部の編集担当者について、三月十日委員長会議で下記のメンバーが選任されました。

統括責任者：遠藤俊一、 杵差岳・平田大六、二王子岳・高橋正英、 粟ヶ岳・遠藤俊一、 御神楽岳・阿部信一、 守門岳・浅野亘寛、 浅草岳・杉本 敏、 平が岳・櫻井昭吉、 越後駒ヶ岳・米山孝志、 中ノ岳・目崎貞良、 八海山・吉田理一、 苗場山・森 庄一、 佐武流山・矢尾板二郎、 鳥甲山・宮崎幸司、 金北山・藤井与嗣明、 米山・橋本正巳、 巻機山・本間宏之、 火打山・妙高山・七澤恭四郎、 焼山・鶴本修一、 雨飾山・後藤正弘、 青海黒姫山・小野 健

備考：白馬岳・雪倉岳・朝日岳は富山支部、飯豊山は山形支部の担当となります。

取材期間は、二〇一三年三月～二〇一四年一月で、二〇一四年五月下旬発刊予定です。

平成二十五年度全国支部懇談会について

今年度で第二十九回目となる全国支部懇談会は、静岡支部の担当で次の要領で開催されます。

日時：二〇一三年十月二十日(日)～二十一日(月)

会場：ホテル アソシア静岡

(J.R 静岡駅北口三分)

富士山近辺や日本平のトレーニングを予定。

会費：二万円

申込方法：締め切りは六月三十日です。

問合せ先：

日本山岳会 静岡支部事務局 有元利通

〒四二〇一〇八七一

静岡市葵区昭府二丁目二六一九

TEL&FAX：〇五四―二五一―四一九八

e-mail：fuj-arj@nifty.com

越後支部会員の加入・勧誘運動のお願い

昨年十二月八日支部年次晩餐会で来賓参加の尾上昇会長からお話しがありました。が、日本山岳会の平均年齢は六十七歳と言われております。しかし、最近の各種取り組みにより、高齢化と会員減少に歯止めがかつて来たと言明されておりました。しかし、残念ながら越後支部では、本部報告以上に高齢化と会員減少が急速に進んでおります。

今年度越後支部では、「新入会員の加入・勧誘運動に取り組み、十人以上の新入会員獲得を目指す。」と本部に公言しております。支部員各位のお力を借りて目標を実現したいと思っております。

入会パンフレットと入会申込書は、事務局にありますので是非お声かけ下さい。支部会員移動連絡

(二〇一二年十二月十六日)

(二〇一三年四月十五日)

1) 支部退会会員

嶋田 五郎 (No.10499)

二〇一三年二月

2) 支部編入会員

岸 清二 (No.9689)

千九四〇一〇七六

長岡市本町二二二一三

TEL：〇二五八―三二一―八九七

3) 代表者の変更

新潟大学の会 (No.11119)

千九五〇一二〇〇一

新潟市西区浦山一―二―五 三保日出男方

TEL：〇二五―二三一―〇三八九

4) 住所表示変更

橋 本 正 巳 (No.7758)

千九四三―〇一四六 上越市とよば九

5) 支部会員総数

二〇一三年四月十五日現在

支部員総数二一七名、会友〇名

6) 新会員入会申込申請中

① 佐藤 芳英

千九五九―一五一三

南蒲原郡田上町大字川船河甲二五〇―四一

TEL：〇二五六―五二―九四九三

② 湯本 浩司

千九四三―〇六〇二

上越市牧区平方四六九―二

TEL：〇二五―五三三―五七六七

事業委員会

今年度高頭祭に日本山岳協会神崎忠男会長がご来山

越後支部主催の第五十六回高頭祭は、七月二十五日(休)午後二時三十分頃より弥彦山大平園地の高頭仁兵衛寿像前にて開催されます。今年度の来賓は、前日本山岳会(JAC)副会長で、現在日本山岳協会(JMA)会長である神崎忠男氏をご来山されることになりました。当日、神崎会長には高頭仁兵衛寿像前にて、「日本の登山界について」と題して記念講演をお願いしてあ

ります。高頭祭は、日本山岳会第二代会長であった高頭仁兵衛翁の遺徳を偲ぶ越後支部の伝統行事ですので、多数の方のご参加をお待ちしております。

編集後記

子供の頃、家の近くの白山神社で年二回の祭りがあり見世物小屋がかり屋台や露店が並んで大変賑わい。見世物は裏から覗いてインキキだと子供同志でも納得出来たが、マムシに手を噛ませて貝に入った薬？を出してこれを塗るとすぐ治り腫れも来ないと実演しながら売っていた。これにはどんな秘密があるのか？本物のマムシだよな。

後年、日赤へ救急法を勉強しに行った。野外講習もありマムシに噛まれたら……はさておいて、マムシとは相手を一回噛むと無毒になると云う。再度毒をもつには一週間位はかかると思う。これで子供の頃の絡繰りがわかった、毒をはかせた物を持って来ているのでいくら噛んでも無毒なのだ、そうかあのお兄さんもインキキだったんだ。

マムシと云えば五頭山、秋エボシ岩から旧スキー場への分岐点へ来た折、居るは居るは枯れたススキの葉にまでからんで、その数四十、五十、いやその先はわからない。急に恐ろしくなつて妻と共に逃げ帰ったからだ。いったい何の集会だったんだ、先輩に聞くとマムシは朝礼をすると云う。本当かや、未だに謎が解けないでいる。

会員皆様の気軽な投稿を待っています。(A・K)